

「一、二、三、四、五……」と親指に力を入れて、数字を一生懸命数える王くんの声が教室に響く。「一〇！」と同時に「うわ、負けやー」と残念そうにいう先生を見て、いつもは黙っている静かな王くんがニコリと得意満面に笑う。ここは砂子小学校の日本語教室、王くんと先生が指すもうをしているのだ。その後、いろいろな表情が並んだ絵カードを見て王くんは「やったー！」の笑顔を指差す。「これは『うれしいです』やね」と先生がいうと、王くんが「うれしいです」と続ける。来日当初は、首を横に振るか縦に振るか、でしか意思表示ができなかった王くんだったが、三カ月目の今日の授業では「このことは漢字ある？」「それ知ってる」など積極的に自分から話すようになっていた。砂子小学校では、五人の先生（一人は中国語の先生）が、さまざまなルーツをもつ子どもたちの日本語支援や中国語による母語支援に取り組んでいる。

しかし、ここに来るまでには試行錯誤の連続だったようだ。「いろんな先生が日本語教室を担当したほうがいい」という坂田校長先生の方針から、二年ごとに日本語教室の担当教師が交代する。日本語教育のプロではない先生たちは、目の前の子どもを何とかしたいと教授法や教材選択に悪戦苦闘を重ねて自分なりのやり方を会得していく。週に一度日本語支援に訪れているわたしにまで、「なんでもいいからアドバイスをください」と助言を求められた。「わかる授業」という原点に立ち返るための打ち合わせが連日遅くまでおこなわ

り」の踊りが披露され、大喝采を浴びていた。低学年の子どもたちは、舞台上立つ誇らしげで堂々とした高学年の姿に数年後の自分を重ね合わせ、「中国にルーツをもつわたし」に気づき、誇りをもつようになるのだ。不登校気味だった女の子が、「民族衣装を着て踊りたい」一心で学校に来て誰よりも熱心に練習し、本番で素晴らしい舞踊を披露したのだが、その達成感が彼女を強くしたのだろうか、その後は休むこともなく学校生活を送っている。砂子小学校を訪れる人は、わたしもそうだったのだが、子どもたちが非常に元気のびのびと過ごしていることにきつと驚くだろう。「中国にルーツがある」ことは彼らにとってマイナスどころか、むしろプラスで「ちょっと自慢」（一年生男児）できることなのである。

### 「多文化共生」の場としての砂子小学校

もちろんこんな砂子小学校でも課題は少なくない。たとえば、日本生まれの「中国にルーツをもつ」子どもたちは、親子の絆の言語である中国語が話せなくなってきたり、「わたしの娘に中国語をしっかりと教えなかったことを今でも後悔しているんです」という中国語の先生は、同じ思いを保護者にさせたくないと土曜日に図書室を利用して中国語母語教室を開いている。「親子で深い話をするために、子どものアイデンティティ保持のために、子どもが親の祖国に誇りをもつために、家庭でもっとも中国語を話してほしい」と中国語の先生は日々親への啓発をおこなっているが、「学校の勉強のほうが大事」という親が多く、母

多文化を  
ささえる  
人びと

## 門真市立砂子小学校の取り組み 中国にルーツをもつ子どもたちのために

中国と日本、ふたつのルーツをもつ子どもたちが多く通う門真市立砂子小学校。

ふたつの文化に興味をもち、理解を深めるためのさまざまな取り組みが、教師と児童の二人三脚ですめられている。

### 高橋 朋子

大阪大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員

れていたようだ。日本語教室は子どもたちだけではなく、教師自身をも大きく成長させている場であると感じたのである。

#### 砂子小学校の取り組み

門真市立砂子小学校の校区には、中国帰国者が集住している三つの府営住宅があり、小学校には中国にルーツをもつ子どもたちが約一〇〇人（全校児童の二七パーセント）も在籍している。校内では大声で中国語を話す子どもたちの姿が普通に見られ、中国語が飛び交うこの状況は、日本人児童にも自然に受け止められている。参観日に、二年生女兒の保護者に「お子さんは中国の友だちと遊んでいますか」と聞いてみたところ「毎日遊んでますよ、娘には日本とか中国とかいう区別はないみたい、『友だちやし遊んでる』って感じですよ。わたしはこれから中国語の時代やし『中国語教えてもらい』っていつてるんやけど」と笑いながら答えてくれた。保護者にもこの環境はごく自然に受け入れられているようだ。

「中国の子どもたちは、ふたつのルーツをもっているんやから、二倍幸せにならなアカン」という校長先生のことばが示すとおり、この学校では中国にルーツをもつ子どもたちが生き生きと活動できる機会が多い。この一年を振り返ってみても、「フイエスタすなご」、「門真市民族フェスティバル」、「門真春節祭」など砂子小学校の国際理解教育を地域に発信するイベントが目白押しであった。日本語教室からは、男子児童による獅子舞、女子児童による「竹結舞」、「火把节（たいまつ祭

語保持の重要性が理解されるのはまだまだ時間がかかりそうだ。

だが、声高に「多文化共生」を叫ばなくても、小さな取り組みを日々ひとつずつ積み重ねて保護者や地域をも巻き込んでいくなかで、砂子小学校は「日本の子どもたちも中国にルーツをもつ子どもたちも互いにその違いを認め合い、胸を張って生きていける場」として着実に歩を進めている。校歌のなかの「翼に傷がついたそんなときにこそ 深い絆で結ばれた 友情と共に 带着友情和勇氣 携手迎向光明未来 前を見て進む 友情と共に」という歌詞はその姿を象徴しているといえるだろう。

砂子小学校の玄関に入ると、日中両言語のあいさつが迎えてくれる



1年生の日本語初期指導  
1対1で丁寧におこなわれている



民族フェスティバルで踊りを披露する5年生女子児童



フイエスタすなごで3年生が披露する「中国ごま」